



〈 連載 (225) 〉

サンクト・ペテルスブルグで開催された 「国際船舶復原性会議」



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

3年おきに開催されている船舶復原性に関する国際会議「STAB」が、白夜の6月に、ロシアのサンクト・ペテルスブルグで開催された。サンクト・ペテルスブルグは、バルト海の東端にあり、以前はレニングラードと呼ばれていたが、ロシアの改革が進んでレーニンの評価が下がったこともあって、今では昔の名前にもどった。

かつてはロシアの首都であったこともある都市であり、バルチック艦隊の基地として、またエルミタージュ美術館なども有名である。市街地のホテルは、この季節は価格が暴騰して1泊3万円も覚悟しなくてはならないといった情報から、市街地から車で1時間ほどの郊外のリゾート地のホテルでの開催となった。

日曜日の夜のレセプションから会議は始まり、4日半の会議日程で、約70件の論文発表があり、IMOのSLF関係者も含めて、全世界から100人余りが参加した。復原性は船舶設計の最も基本となる性能であるが、最近、造船や海運企業からの参加者は減り、大学、船舶研究機関、各国政府の海事行政担当部門、主要船級、そして船舶コンサル

などの研究者・実務者が中心となっていた。日本からは、大阪大学、神戸大学、海上技術安全研究所、大阪府立大学から、全部で7人の研究者と大学院生の参加であった。

この会議で議論されたことがIMOの議題として挙げられることも多いので、企業等の実務者もぜひ参加をして欲しいと思う。次回と同国際会議は3年後にアテネでの開催が決まった。

さて、白夜のサンクト・ペテルスブルグでは、23時を過ぎた頃によりやく暗くなり始めるが、深夜1時でも空にはうっすらと明るさが残った朝焼けの状態が続き、3時くらいには再び明るくなり始める。このため部屋で寝るためには、窓の厚いカーテンが必須となる。筆者の宿泊したホテルのカーテンは十分厚いのだが、隙間からの光を完全に遮断することは難しく、なかなか眠りづらかった。もっと北にいくと深夜になっても太陽自体が地平線を低く移動するだけで沈まず、本当に深夜も明るい白夜もあるらしいが筆者にはその体験はまだない。

さて、会議の3日目、講演が終わった後、

サンクト・ペテルスブルグの中心街へのツアーが催された。国際会議が主催する、いわゆる、コンフェレンス・ツアーである。18時にバスでホテルを出発して市街地まで約1時間半ほどかかった。バレエ観賞、民族舞踊の観賞、街の散策など、それぞれのチョイスで楽しんだ後、23時から市内をバスツアー。さらに深夜1時から約1時間のネバ川のボートツアーというツアー構成であった。

サンクト・ペテルスブルグは、市街地の中央をネバ川が流れ、市内には運河が張り巡らされており、「北のベニス」とも呼ばれている。このネバ川と運河を巡るボートツアーは、市内観光の中心的な存在にもなっていて、驚くほどたくさんのボートが運航されている。しかも、深夜1時発というボートツアーが目白押し。これは、夜の川岸の夜景がすばらしいことと（白夜の夏は、深夜1時過ぎにならないと明るすぎて夜景が楽しめない！）、ネバ川は重要な物流幹線として機能しており、サンクト・ペテルスブルグから上流に遡る大型バージ等の船を通すために深夜1時半に橋の一部を跳ね上げるので、これを見物しようというもの。

橋にはそれぞれイルミネーションが施され、その光輝くいくつもの橋が次々に跳ね上げられていく光景は確かにすばらしいものであった。

暗くて寒い冬の反動なのか、白夜のサンクト・ペテルスブルグの町は明け方まで、多くの市民や観光客で賑わっていた。我々を乗せたバスが郊外の宿泊しているホテルにたどり着いたのは明け方の4時過ぎ。北欧の人々が、いかに夏を待ち望み、満喫しているかを実感できるツアーとなったが、

翌日からの会議にはドーンと疲れが溜まってしまったので、国際会議向けのツアーとしては若干問題がありそうだ。

サンクト・ペテルスブルグの港には、クルーズ客船用の施設が作られていて、現在、3隻までのクルーズ客船の停泊が可能となっている。前述のコンフェレンスツアー時の自由時間を使って、このクルーズ埠頭まで足を伸ばしてみた。ネバ川に架かる最も下流側の橋の近くにごく簡単な栈橋が作られていた。

ちょうど週の中ほどの曜日であったが、3隻のクルーズ客船が停泊していて施設はフル稼働状態であった。「シルバー・クラウド」、「アザマラ・ジャーニー」、「ドイッチェランド」の3隻である。欧州のクルーズマーケットが爆発的に成長をしており、特にイギリスおよびドイツ基点の定点定期クルーズが夏の間盛んに行われ、サンクト・ペテルスブルグにもクルーズ客船が定期的に寄港するようになり、行政も、観光振興の一環としてクルーズ客船の受け入れに積極的になっているとのこと。

サンクト・ペテルスブルグは、バルト海で発祥の新しいビジネスモデルである「クルーズフェリー」の次のターゲットとしても注目を集めている。クルーズフェリーの最大の集客力は、船上での免税品にあり、EUの経済統合によって次第に船上免税品を扱える航路が減少しつつある。現在は、バルト海に浮かぶフィンランドの自治領エーランド島がEUに加盟しておらず、ここにワンタッチすることで免税品の販売を続けてきている。

消費税が驚くほど高い北欧においては、クルーズフェリーは、免税品購入という生活防衛と、クルーズという楽しみを同時に満足させてくれる貴重な存在となっているのだ。しかし、いつまでこの免税品販売ができるかは予断を許さず、各社は次の寄港地

を探すのに余念がない。ロシアがEUに入るといふ可能性は当分はないので、スウェーデンおよびフィンランドからのクルーズフェリーで、サンクト・ペテルスブルグの港が賑わうようになる可能性は大きいように思われる。



サンクト・ペテルスブルグのクルーズ客船埠頭に着岸する「アザマラ・ジャーニー」

